

そして、夏、暑くなり始めた七月の初旬、四平市在住日本人の第一陣の引揚げが開始されたのである。

【執筆者の横顔】

會田鋭一郎氏は、昭和七年生まれの現在六十二歳である。

名門、山形中学、現在の東高等学校から中央大学法学部を卒業し山形県庁入りした。

會田氏の父親は、当時満州鉄道の職員として遠方に勤務しているさ中に日本敗戦に遭い、移住の場所も不詳どころか生死不明なので、子女六人を抱いて母親は錯乱しそうだったに違いない。その母親を、中学一年生の八月、少年でありながら、長男として必死になつて手助けをし、姉たちを守りながら死線を突破したその堅忍不拔の精神が鍛え貫かれ、そのおかげで一家の無事が保たれたのであろう。

当時の旧満州は人間らしい生活ができるような状態ではなく、正に地獄そのものであったが、数カ月後の冬も迫るころ、奇しくも父親が四平市に住んでいる家庭のもとに帰られたが、それまでに一家の生存を支え

た死に直面しての創意工夫しての努力と信念と家族並びに隣人愛を貫いて生きた會田氏の人生観は、この戦乱の中で生まれたのであろう。

現在は、県社会福祉事業団、理事長の要職にある。

この事業団は、県内に救護、身障者の更正援護、授産、特老ホームなどの、十四の施設を擁している県内最大の福祉施設事業を運営しているが、施設利用の大勢の方々から、救世主のようにあがめられ、したわれている會田氏である。

(引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

渡満―終戦―逃亡―帰国の記

福島県 鈴木康夫

昭和十六年三月、私は福島県安積郡赤津村立赤津尋常高等小学校を卒業することになっていた。

ちようどそのころ国策として「若人よ大地へ」の言

れてきたことで、今更おめおめと故郷に帰ることができ
るかと思ひ、齒をくいしばって頑張った。

やがて、内原訓練所の訓練も無事修了し、いよいよ
七月の初め満州に渡るようになった。渡満の三日前
は、両親が別れの面会に来てくれたが、お互い目をう
るませながらの別れとなった。時に当年十五歳であつ
た。

その後、福井県の敦賀より船に乗り、朝鮮の清津・
羅津を経て、満州鉄道で哈爾浜の青年義勇隊特別訓練
所に入所した。

ここで三カ年間の学科と農事実習、さらに、きびし
い訓練（軍事訓練）を受け、そして、大きな目的であ
る開拓団に入所した。開拓団といっても、新しい土地
を開拓するのではなく、すでに中国人が耕作していた
畑を受けついで穀物や野菜を耕作するというのが私た
ち義勇軍の開拓団であった。

この開拓団で一年余り経過したころ、日本の戦況も
悪化し、私たち団員の中で大正生まれのものは大半が
召集され、残された昭和生まれは、第二国民兵役とし

て開拓団に残っていた。

ちょうど昭和三十年八月九日、私たち開拓団の事務
所に指令が入り、阿武隈開拓団の団員は全員近くの佳
木斯市の佳木斯国民学校に直ちに集合せよとのことで
あった。

私たちは、この開拓団は一体どうなるのか心配と疑
念を持ちながら、約四十キロ離れた佳木斯市に着のみ
着のまままで夜通し歩き続け、明るる十日の朝九時半ご
ろ、佳木斯市国民学校の校庭に到着した。

そこには私たち開拓団員を兵士として統率する尾形
大隊長がいた。尾形大隊長は私たちの人員を点呼し、
次のような仕事を命じた。

まず、倉庫（軍事物資倉庫）に行つて軍服に着がえ、
さらに適当な肩章を捜し肩に付けた（軍曹の肩章を見
付け出し付けたので、町を歩いているとき、満軍の兵
士から敬礼をたびたび受け変な気になった）。

次に軍属の官舎には軍の秘密が残されている場合が
あるので、その官舎をすべて焼き払うように、という
ことで、二人で一列五十軒を受け持たされ、マッチで

火をつけ次々と焼き払った。軍属の官舎は家族と住んでおり、いっどのようにして退去したのか、ある家は御飯を食べたままの食台を残し、また、ある家はかぎをきちんとしめ、荷物などきちんまとめたままの様子で、特に立派な家具や珍しい飾り物などを灰にしようするのは、とても心残りであったが、作業の時間も決められていたので、二人で次から次へと五十軒の官舎の焼き払いを行った。

このようにして、作業が終わったのは、午後二時ごろであったが、終わって再び佳木斯^{ぢよむす}国民学校の校庭に集合し、作業の終わったことを大隊長に報告した。尾形大隊は私たち義勇軍を含め、軍人を交えておよそ百五十人ぐらいの大隊であった。

大隊長の話によると、「我が大隊はこれから七里ほど南にある依蘭という町に出発する。そこには、我が関東軍が多数終結し、そこで我が軍の今後の行動が決まるので、そこまで頑張つて行軍するように」とのことであった。私たちは直ちに行動を開始したが、佳木の町を通るとき、日本の日の丸をつけた飛行機が低

空で飛んで来たので、私たちは声援を下から送ったよたん、いきなり機銃掃射を受け、何人かがやられたようで、私は我が身を守るため逃げるのが精一杯であった。

それ以後は、飛行機の音がすると、近くの木の下や、畑の中に身を低くして、我が身を守るようにした。

私たちの行軍は、真夏の太陽の照りつける酷暑四十度の中であつたので、歩いていてものが渴き、とても我慢ができない状態であつた。しかし、辺りに水はなく、たまに井戸を見つけると、井戸には毒薬が投げ込まれているから、絶対に飲むではならないといわれて、水は一滴も飲むことができず、この苦しさに耐えきれず、水を求めに逃げ出した者もあつた。

しかし、私は我慢し、水にありつけたのは夕方雷雨があつて、畑のうねの間にたまった水を手拭いで漉して飲んだときであつた。

行軍は夜もつづき、五分間の休憩のたびに、睡眠をとりながらの歩きは、つらくて、このまま置いて行かれても、ゆつくり寝たほうがましだなどと考えたりし

た。

次の日の朝、目的地の依蘭の町に近くなったころ、私たちの進行と反対に佳木斯市の方向に歩いてくる日本兵に度々出会った。その兵士の話によると、依蘭の町は既にソ連軍に占領され、日本人はみんなソ連兵に捕らえられているということであった。

その兵士たちは、今後どのような行動をしようとしているのか、ただ、危険な場所から遠ざかるだけの行動で、自分らは一体どうするのかの判断もなく、ただ、あてのない旅をしているという感じであった。

その後、依蘭の町のすぐ手前まで来たとき、大隊長よりの指令があり、「我々は、目的地である依蘭の町を迂回し、南方方面に向けて行動する。全員大隊の行動から離れないようにすること」ということであった。

私たちは、今までは目的地に向かって、自分の身の処理方の希望を持つての行動であったが、南方方面への行動ということで、私たちはどこに行くのか、どうなるのか、不安を抱きながらの行動に入ったが、どうしようもなく、ただ、大隊のみんなについていく方法

しかないことを悟った。

南方方面に行動を開始した私たちは、極度にソ連兵を警戒し、できるだけ大通りや大きな町を避け、山間の部落、部落に通ずる小道のみを歩く行動となった。

八月十一日、お昼ごろ、中国人の小さな部落に着いたので、私たちに昼食を出させるように交渉することになった。

そこで、私は開拓団にいたころ若干の中国語が話せるようになっていたので、もう一人の友人と、通訳係を命じられ、ほかの兵士三人と私たち二人の計五人は、今後食事のための中国人部落との交渉をすることになった。

最初の部落では、百五十人分の食事はこの部落にはないということであったが、交渉相手の中国人に三人の兵士が銃をつきつけ、隣の部落からも集めるように迫った。

やがて、とうもろこしのパンがたくさん準備され、私たちはそこでパンを食べ、部落をあとにした。

このようにして、南下の行動をとった私たちだった

が、初めはソ連軍や八路軍（共産軍）を警戒していたので、行動中の三度の食事は中国人部落で食べさせてもらうが、夜は危険の少ない山の中で野宿したりしての行動であった。

また、食事の時間近くに中国人の部落に近づくと、情報をいち早くキャッチして、部落内の道路のわきに、人数分の食事を準備して待っているという部落もあった。私たちは、そんなときは早く食べ、お礼を申し述べて早々に立ち去った。こういう部落は「さわらぬ神にたたりなし」の考えで、早く日本兵に立ち去ってもらうのが目的でこうするようであった。

それから一週間も立ったころであったか、私たちはある部落に近づいたころ、部落の入口の道路の両側に日本人の避難民、年寄りと女、子供の集団およそ二百人もいたであろうか。疲れ果てた姿で、それぞれ荷物をそばにかかえるように置いて休んでいるところであった。どこから来たのかと尋ねると、近くの開拓団から避難してきたが、これからどうなるかわからない。食べ物がなくなつたので、中国人部落で食べ物と衣類

などを取り換えてもらつて飢えをしのいでいるということであった。武器も何も持たない避難民の人たちは、一体今後どうなるのか、心残りであったが、「みんなで助け合つて行動すれば大丈夫だから、頑張るように」と話して私たちは別れを告げた。しかし、あの人たちはその後どうなったのか、もちろん知るすべもないが、強く脳裏にやきついていく。

私たちは、毎日毎日歩き続けたが、そのうち落伍者がでて、「こんな苦しいあてのない行軍をするなら、いっそ中国人に助けを求めてここで暮らしたほうがましだ」という者もあり、大隊から一人離れ、二人離れていって、残りは百人程度になっていった。

この人たちは、果たして、中国人に救われたかどうかはわからない。

私たちが歩き続けた道のそばには、日本人らしい男の人が、衣服をみんなはぎ取られて死んでいるのを見たび見かけたし、また兵士（日本人）が、私たちと同じ行動をしたのであろうか、疲れ果ててそのまま倒れ、死体となつて横たわっている光景も幾度か目にし

た。その死臭は、一キロ先にまでただよい、悪臭が鼻をつき、いたたまれない気持ちであった。

私たちが南下の行動に入ってから十日ぐらいたったころであろうか。方正県という所の山間の道歩いていたら、前方の広い畑に何か並べられているのが目に止まった。

みんなで近づいてみると、つい先ほどと思われる、日本兵二百人以上の武装解除が何物かによって行われたあとであった。

広い畑の中に、日本兵の三八銃、銃剣、手榴弾などが整然と畑いっばいに並べられて置いてあった。並べられた武器は比較的新しいものであったので、銃を持つている兵士の人たちは、めいめい新しいものと取り替えたりした。私は通訳係なので、特に武器は必要なかったが、自分の身を、いざというとき守るためと、自分が敵にやられ動けなくなつたときの自決用にと、手榴弾二個をいただいた。

私たちが歩いていて、大変困つたことは、山と山との間にある広い湿地帯を歩かなければならないときで

あつた。

多分、方正県を大分過ぎたところであろう。地名はわからないが、とにかく水のためまわっているところを半日ほど歩き、そして乾いた平地になつたかと思うとまた、湿地帯が続くというところであつた。私たちのはいている靴は軍靴だったが、湿地帯を長く歩いていると靴の皮が柔らかくなり、乾いた道を歩くと、皮が堅くなり、水でふやけた足の皮が、靴の皮に当たって、すりむけてくるのである。

このため、足が痛くて歩けなくなり、何人かの人たちが、近くの部落に助けを求めに行き、二度と戻つてこなかつた人もいた。

私も、多少足が痛くなつたが我慢して、何とかこの場を切り抜けることができたが、その後、靴の皮の乾燥によつて、靴のぬい糸がほとんど切れてしまい、途中でみつけたひもで靴をしばつて長い間歩いたのは、大変なことであつた。

その後、中国人部落で中国人の靴を徴発して、無難に歩くことができた。私たちは行軍にも慣れてくると、

食事と宿泊は中国人の部落でさせてもらうことになった。中国人にとつては、はた迷惑であったが、私たちが日本に帰れるところまで歩くためにはやむを得ないことであつた。

ちようど行動を開始して、一カ月近くになつたころ、昼食を求めにある部落に近づいていった。すると、部落の三百メートル手前まで来ると、いきなり銃声が出て、そのあと銃声の音が激しくなつた。私たちは、道路のそばにある高粱畑こうりやんに入り、戦闘態勢に入つた。

私は戦闘員でなかつたので、戦闘員の中間ぐらいの位置で前進していった。そのとき、敵の撃つた弾丸が高梁の茎を貫ぬいて行く音がとても無気味であつた。やがて、私たちの部隊はその部落に入り、抵抗してきた部落の人たちは全員私たちの進行と反対の方向に退去してしまつた。

そこで私たちの部隊は食料を求めて、部落内を回り穀物や卵、野菜などを集めた。そのうち、退去した部落の人たちが、応援を集め、再び襲撃して来たので、我が部隊の人たちは反撃した。ちようど私の隣で応戦

していた一人の兵隊が胸を撃ちぬかれ即死した姿を見たときは、私は恐ろしくなり、しばらくは震えが止まらなかつた。

間もなく、私たちの部隊は、食料を袋に詰め込み、持てるだけ持つてその部落を後に山中に逃げ込んだ。それからまた、山の中の小道を歩き続け食料がなくなると、山すそにある部落を見付け食べ物を乞うた。たいがい部落の人たちは、表面上は快く食事を与えてくれたようであつた。

何日も山道を歩いていて、しばらくぶりにやや広い道に出た。山道とは違つて広い道路は歩きやすかつた。みんなは心よくして、しばらく南の方向に歩き続けた。およそ三十分も歩いたころ、前方より装甲車のエンジンの音が聞こえてきた。初めは敵か味方か半信半疑でそのまま道を歩いていったが、やがて装甲車のエンジンの音と共に聞き慣れない外国語の話し声も聞こえてきたので、はじめて敵とわかり、後続の隊員に直ちに道路わきのやぶに身を隠すように伝えた。

しかし、逃げる時間がなく、みんなは道路のそばの

やぶの中三メートルぐらいのところを身を伏せて、息を殺し隠れた。

そのとき、ソ連兵の戦車や装甲車に続いて歩兵の兵士が銃を構え、道路の両側をつかつかと歩いて行く姿が目の前にあり、いつ見付かって撃たれるか、神に祈りながらの気持ちは、とても生きた心地がしない状況であった。ソ連兵が去るまでの時間は五分ぐらいだったと思うが、それはそれは、とても長く感じられる時間であった。

それからはまた、山の中に入り、ソ連兵のいない山道を探しながらの行軍であった。

このようにして歩いている間、山中の部落にたどり着くと、部落の村長から、「日本は戦争に負け、関東軍は解散になったから、あなたたちも武器を捨て降参しなさい」ということを度々聞かされていた。

しかし、私たちの部隊は、日本が本当に戦争に負けたのか、この時点ではまだ半信半疑であったし、武器がなくなれば食料にもありつけないし、また日本に帰ることもできないと考え、その都度武装解除には応じ

なかった。

まずまず、山深い道をたどり南の方へ南の方へと行軍を続けた。

だから、私たちの歩いた地名は、出発点の佳木斯、依蘭、そして方正県まではわかっていたが、その後の行軍は吉林方面ということだけしか分からなかった。

とにかく、山中を南へ南へと歩いていったのである。佳木斯を出発してからおよそ二カ月余り過ぎたころであつたらうか。大分気温も涼しくなつて歩きやすくなり、私たちの部隊は山の峰にある道を歩いて、谷底に下りたときであつた。ちょうど小川が流れ、きれいな水が音を立てて流れていた。私たちの部隊はそこにたどりつくと、休憩の指示があり、ここで昼食をとるので、それぞれ飯盒炊きをするようにと指令があつた。

私たちは、持っている米やとうもろこしなどを出して、飯盒に入れて洗っているときであつた。

突然、人の大きなとなり声が聞こえたかと思うと、山の上から私たちのいる谷川に向かって、一斉に射撃

が行われた。そのとき、大隊長の「逃げろー」の声があり、その声のある方に荷物も全部捨て、一目散に走った走った。途中「やられた」「だめだー」の声が何度か聞こえたが、振り返ることもできず、小さな山を三つほど越えたところまで逃げのびた。

しばらくして、逃げのびた人たちが、「おーい」「おーい」と声をかけ合った結果、谷底で飯盒炊さんしたときは八十人ほどの人数であったが、逃げのびて集まった人数はわずか五十人足らずであった。

それから、みんなは、ホッと一息をついてしばらく休んだ。その間、谷底から逃げるとき銃弾を受けた仲間が、手榴弾で自決したのだと思われる無気味な爆発の音が、何度か山の中にこだまして聞こえた。

私たちは今後どうしようかと話し合った。

しかし、日本に帰るためには、これからもまた南に下がらなければならない。ここに止まるよりも、危険を覚悟でさらに行軍を続けるほかないという結論に達した。

私たち約五十人ではあったが、また行軍を開始した。

部落に着く度に武装解除を迫られ、その度に断って逃げるように部落を離れて来ているので、再度攻撃を受けることは必至であった。さらに交通が不便な山の中の部落をたどりながら歩きつづけた。

一斉射撃を受けてから十日ほどたったころであったろうか。山を下りたとき、急に視界が開け、人里離れた所であったが、平地から盛り上がった一筋の鉄道路路が見えてきた。この二カ月余り山道だけを歩き、列車などに縁のなかった私たちが、日本人の作った幅の広い複線の鉄道路路が、どういいうわけかとても懐かしく、その上に駆け上がり、線路にほほずりをして、急いでその場を離れ再び山へ向かっていた。

そしてまた、私たちのあてのない行軍となった。

しかし、出発当時とは違い、武装解除を迫られ、断り続けてきているので、今ままでおり中国人部落のうのうと野宿させてもらえる状況ではなかった。それからは、中国人部落で食料をもらい、夜は山の中で野宿をするようになった。

このころは十月も半ばになり、夜の野宿は寒さを感
じるようになり、寝るときは辺りの木の枝を折ったり、
山草をむしりとって、それを下に敷いたり、上につけ
たりして、みんなで体を寄せ合って寝るようにした。

十一月も近づくと、夜の寒さは耐え切れなくなり、
危険を冒しても、山の中の中国人部落をさがして、一
夜の宿を乞うようになった。最近はその部落の人たちも口
をそろえて、「日本は戦争に負けたのだから、ここに
残って日本に帰るまで仕事を手伝っていつたらどう
か」と、中国人にしては、やさしい言葉をかけてくれ
るのであった。

しかし、部落に残っても果たして日本に帰れるのか、
何の保証もない。それよりも初期の目的のとおり南に
下って日本に帰れる機会を見付けることが大切だと考
え、また行軍を開始し、毎日歩き続けた。

佳木斯を出発して早いもので、もう三カ月になろう
とする。忘れもしない十一月三日の日であった。前日
私たちは、「明日は明治節だなあ。今年中には日本に
帰れるかなあ」などと話し合い、久しぶりで、少し大

きな部落に到着した。その部落には、特に中国の軍人
らしい人もいないし、平穏な雰囲気ですべての人の対応
もよかつたので、私たちは少し安心し、一夜をこの部
落で過ごすことにした。

しかし、いづとうなるか危険性もあったので、寝る
ときは靴を脱ぎ、そして、足に巻いている「巻きゃは
ん」をとるだけで、そのまま、いつでも逃亡できる服
装で寝ることにしていた。

朝、白々と夜が明けるころであった。部落で寝てい
ても熟睡もできないので、うつらうつらしているとき
であった。

突然、外で花火を打ち上げるときのような軽い音が
「ポーン」としたかと思うと、その後すぐ、銃弾の撃
つ音が絶えまなく「ダダダダダ」と聞こえ、家の壁
に当たる銃弾のぶい音が「ブスーブスー」と耳に入
ってきた。

私たちは、夢中で外に出て、銃弾の飛ぶ反対側の家
の壁に身をひそめ、家々づたいに逃げ走った。このと
きは、どこをどういうふう逃げ走ったのか。いつの

間にか部落の門に近い道の側溝の中まで来ていた。そこで、ほっと一息ついて辺りを見回すと西側の小高い山の上にたくさんの軍人がいて、私たちのいる部落めがけて雨あられのように銃弾を浴びせているのであった。

私はこのままではやられてしまうと、側溝づたいに腹ばいの姿で、部落を離れるため全力で逃げた。途中、私のすぐ後ろの人が「やられたあ」と叫んだのが聞こえたが、どうすることもできず、前へ前へと進んだ。銃弾は、私の左右をおきみにうなりながら通り過ぎていったが、幸い弾は私のどこにも当たらなかつた。部落から一キロぐらい離れた川岸までたどり着き、逃げた者同志が自然と集まって来たが、全員で十二人であった。

私たちは今後どうするか話し合った。ここに来る前に通った部落の村長さんのやさしい言葉を思い出し、その部落に助けを求めに行くことにした。

襲撃を受けた部落と一緒に泊まったほかの人たちはどうなったかは知る由もなく、私たち十二人は、暗く

なるのを待つて村長を尋ねた。この部落の村長は戦前日本人と親交があったということで、私たちには親切であった。

この日は村長の家に泊めてもらった。次の日、それぞれの部落に分散し、農業の手伝いをして帰国を待つということになった。

私は、同じ開拓団だった同僚と二人、五十戸ぐらいある中国人部落のある農家に雇われることになった。

この部落は吉林省の三道溝といい、日本人に敵愾心てまがいしんを持つているものは見当たらず、私たちを快く迎えてくれた。

仕事は冬は木を伐採し、それを馬車で運んできての薪割りなど、春から秋にかけては大豆、とうもろこし、高粱こうりやんなどの耕作の手伝いなどであった。当時の農家は貧困で、私たちは働いて食べさせてもらうだけで、下着はもちろん服一枚買つてもらうことなく着のみ着のまま、一年近く過ごしたのである。

こんな生活をしていた十月の半ばごろ、当時の中国軍の八路军から連絡があり、日本人がいたら帰国する

ことになったので、隣の町に集まるようにということであった。

そのとき、雇い主がはじめて古着の上下の中国服を一着くれ、これを着て行くようにと言ってくれた。

隣の町に行ってみると、日本の軍人だった人がたくさん集まっていた。その人たちは、「日本に帰れるという連絡があつてやつて来たが、これは信用できない。どこに連れていかれるかわからないが、今までの炭鉱にいるよりはましだから来た」ということであつた。私も半信半疑であつたが、みんなと行動を共にした。

私たちは半日ほど歩き、やがて駅のある町にたどりついた。そこから貨物列車（無蓋車）にすし詰めに乗せられ、一週間ほど走つたり、止まつたりしながら、錦州省の壺蘆島に着いた。列車に乗っている途中の情報で本当に日本に帰れるとわかつたので、壺蘆島に着いたときには何か夢のような気持ちであつた。

そして、壺蘆島の収容所で二、三日過ごし船に乗り、久しぶりに日本の地、博多港が見えたときには何ともいえない気持ちであつた。

ところが上陸寸前になって、この船の中から天然痘患者が出たので、感染期限の一週間博多港に停泊するとの連絡があり、上陸を目の前にして、がっかりし、身のおきどころに苦しむほどであつた。

一週間が過ぎ、無事なつかしい日本に上陸し、その後、博多駅よりまたすし詰列車に三日ほどゆられ、十一月の末安積郡赤津村の実家に到着した。

実家に到着した後十日ぐらいは、中国に在ることを錯覚することが度々あつた。

実家に到着後は近隣の人や小学校時代の友人とつき合う中で、中国人との生活と言葉から、日本語が私の体から離れ、疎くなつてしまつていたことを知り、人との交際を恥ずかしく思い、独り家にこもり小学生の日本語から勉強をやりなおした。昼は農事の手伝い、日本語から勉強をやりなおした。昼は農事の手伝い、夜、日本語の勉強と、仕事以外は国語辞典と漢和辞典をかかえて、およそ一年間勉強した。すると、国語に自然と興味を持ち、一日でも辞典を開かないと物足りない気持ちになつてきた。こんな中で帰国して、一年半ほど立つたころ、実家の村の小学校の校長先生が尋

ねてこられ、「先生にならないか」との話があった、私は初めは辞退したが、何度か勧誘されるうち、私にできれば先生になってみようかと思ひ、小学校の助教諭となった。

しかし、一年余り小学校の先生を勤める間、将来ずっと先生の職を全うするならば、正式な資格をとった方がよいと考え、資格をとるための学校に進みたいと思うようになった。助教諭になって約一カ年半たったころ、ちょうど教員養成の学校の補欠募集があることを知り、応募した。幸い合格し、今までの先生をやめて入学した。しかし、この学校で勉強している間に、この学校は職業指導を主とする教員養成であることを実感し、私の希望であった国語教師としての内容とは違っていたので、一年を経過した後、東京の大学の編入学試験を受けることにした。幸いにも合格したので上京し大学に入学した。

大学での学費と生活費は、貧困な農家である実家からは出費してもらえないわけもなく、私は苦学を覚悟で上京した。幸い実家では米だけは必要なだけくれると

いうことであつたので、一カ月分の学費と生活費は、実家からの米（月一俵）を運び、東京で売った金とアルバイトの金でまかなつた。

昭和二十九年三月、無事大学の文学部国文学科を卒業し、再び、福島県にもどり中学校の国語教諭となつた。

以後三十三年間中学校の教師を勤め、昭和六十二年三月に退職した。

考えてみると、私が満州からやっと帰り、中学校の国語の先生になつたのは、皮肉にも、中国人部落の一年間の生活の中で、本来の日本語を大部分忘れかけてしまい、帰国後大きな衝撃を受けたことがきっかけとなつたのである。

だから、満州での苦しい体験は、私の以後の人生に大きなプラスとなつて働いたとも言えるのである。

また、中学校教諭退職後も、満州での生活と結びついていた、福島県引揚者団体連合会中国帰国者日本語学校の講師となれたのも、幸運にも第二の人生が開けたことになつたのである。

私の中国（旧満州）での困難な体験は、現在では五十年前の夢の中の出来事のように思えるが、しかし、事実として、他国で、日本への帰国を思いながら散っていた多くの同胞に心から哀悼の意を表し筆をおきます。

【執筆者の横顔】

父鈴木代喜、母ヨシの二男として、福島県安積郡赤津村（現在郡山市）湖南町に出生、昭和十六年三月赤津村立尋常小学校卒業後、小学校の先生と母に勧められ、満蒙開拓義勇軍に応募し、茨城県満蒙開拓義勇軍内原訓練所に入所、同年七月渡満しハルビン市の青年義勇隊特別訓練所で三カ年間、厳しい教育を受け、阿武隈開拓団に入植した。

昭和二十年八月九日、ソ連軍の侵攻により約八十人の団員が避難することとなった。

佳木斯を出発し、依蘭、方正県を通過するときは、何千人と死没している惨状をみながら山野、平原、部落で野宿し正に難行苦行の毎日であり、「泥水すすり

草をかみ」の生死をさまようような地獄図の連続であった。

南へ南へと進み三カ月後吉林省三道溝にたどり着き、約一年間中国人農家を手伝い、昭和二十一年十一月コ口島の収容所より博多港に着いた。

帰国後、実家において一年半、小学校の助教員となり国語教師を目指し苦学して、昭和二十八年日本大学文学部国文学科卒業。

中学校教諭として各地の学校に勤務し、昭和六十二年三月に退職した。

その後、中国での体験を生かし、また同胞の辛酸を目の当たりに見て、余生は一念発起、中国残留日本人孤児の帰国促進、早期自立のために尽くすことを決意し、日夜寝食を忘れ生活指導に奔走し、帰国者から慈父のごとく敬愛され信頼されている。

福島県知事委嘱の自立指導員、郡山市長委嘱の生活相談員、支援通訳、判明、未判明の孤児の身元引受けは五家族に及び立派に定着させている。中国帰国者の大功劳者であり、県内外からその功績は高く称賛され

ている。忘れていた半世紀前の惨状を、この原稿執筆に当たりいろいろ思い出され、眠れない夜が続いたと
のことである。

(福島県引揚者団体連合会)

会長代行 佐藤 清)

父を求めて北満横断の旅

埼玉県 佐藤 彰 恭

〔旅の目的〕 平成五年八月二十三日、成田山新勝寺に旅の安全を祈願し、空港に近いホテルに一泊して旅行の最終打合せを行った。

この旅行は姉と私が、叔父(母の実弟)と義兄(姉の配偶者)の強い協力を得て、「父親探し」と「昭和十三年渡満の地から終戦後の苦難の引揚げまでの地を踏破する」、「最悪の場合は遺骨収集と慰霊」、この三本を主目的として立案したもので、母も当然同行する予定であったが、四、五人の私的旅行となると、訪れ

る土地や順序も希望どおりにはゆかず、二案、三案と変更し、七割方満足できる計画になり、実施する運びとなった。成田を出発地として大連・哈爾濱・佳木斯・齊々哈爾・海拉爾・北京のルートで十二泊十三日間のスケジュールは八十三歳の高齢な母には、非常に無理な異国の強行旅行なので、同行を断念することになった。せめて十年くらい前に実行できたならば、と思うと母の無念さが思いやられる。これも私が仕事に追われて過ぎてきて、定年になってどうにか実行に移されたもので、なかなか親孝行はできないものです。

〔大連の地〕 二十四日午前十時五十五分、大連行は定刻通り新東京国際空港を離陸した。快晴の中を約四時間で大連周水子国際空港着陸、出迎えてくれた旅行者の全ルートガイドの劉紅さんと大連地区ガイド二人に案内されて、ソ連製バンに乗車、大連市内へ。「北方の真珠」と呼ばれた美しい町を想像していたが、騒然とした砂煙が舞い上がる建築ラッシュの街を見て、東京オリンピック前の日本の姿を思い出した。古い建物を取り壊し、高層建築物に変貌の最中で大型ダンブ